

# チヨーサーの “An ABC”

柴 田 竹 夫

全能にして慈悲深き元后，  
御助けを求めて誰しも御下へと急ぐ，  
罪と慈悲と苦悩から解放されんが為に。  
花の花たる栄えあるおとめ，  
御下へと罪に包まれし我は急ぐ。  
救い給え，有能にして慈悲深き御方，  
我が危うき苦難に憐れみを掛け給え，  
むごき敵\*我を打ち負かせり。

5

優しさはその幕屋を御心にしかと張れるが故に，  
御身の我を救い給うを信ず。  
良き心を抱きて助けを請う者を，  
御身は拒み給わず，御身の心は常に寛大なるが故に。  
御身は全き幸福に対し寛容なり，  
避難と平穏と安楽の港なり。  
御照覧あれ，七人の盗人\*に追われし我が有様を，  
助け給え，美しの御方，我が船が砕け散る前に。

10

15

愛しの御方，御身をおいて他に慰めはなし。  
御照覧あれ，御前に置くべきではない  
我が罪と我が破滅は，  
正義と絶望に基づく，

20

耐え難き咎め立てを我にす\*。  
恵み深き天の元后よ、御身の憐れみなくば、  
我非難を受くに値せるを、  
我が罪と破滅は、正義の名において明かさん。

憐れみ深き元后よ、まことに  
御身こそこの世の恵みと憐れみの源、  
神は御身を通して我らと御手を結び給えり。  
まことに、キリストの恵み深き御母よ、  
もし今、正義と怒りの弓\*が、  
初めての如くに\*ひきしぼられるならば、  
正義の神は憐れみに耳を貸し給うことなし。  
だが我らが望みし如く御身を通して我らは恵みを受く。

我が避難の希望は常に御手にあり、  
御身これまで様々に  
我を憐れみて受け入れ給いしこといくたびか。  
されど最後の審判にても憐れみを垂れ給え、  
その時我ら高き正義の御前に連れ出さる。  
もしそれに先立ち御身よく我を戒め給わざれば、  
我が身に実り\*を見出すこといと難く、  
厳しき正義に向かいておのがふるまいにより身を滅ぼさん。

よこしまなる身なれど、御身が受け入れ給わんことを願い、  
我救いを求めつつ、  
御身の幕屋へと急ぐ。恐怖に満つる嵐から  
身を隠す為に急ぐ。この苦境に立つ我を助け給え。  
我が心、我が行ないは獣の如きものなれど、

なにとぞ我を御身の恵みの衣でくるみ給え。

御身の敵にして我が敵なるものが、

見よ、我を死へと駆り立てんとす。

栄えあるおとめ、御母よ、御身は地におかれても

海におかれても無慈悲なりしことたえてなく、

50

常に甘美と憐れみに満つ。

我が御父\*が我に御怒りを向け給わぬように助け給え。

御身が語り給え、我御父にあえて御目に掛かろうとは思わぬ。

ああ、この世にてかくの如く暮らし来たりし我故に。

もし御身我を救い給わずば、まこと

55

御父は我が魂を永遠の悪臭\*へと追いやらん。

御父にかく告げ給え、御父は御心によりて、

一個の人間となられ、我らと御手を結び給い、

あらゆる篤信の侮い改むる者に

総ての赦しとして、十字架の上で、

60

貴き御血をもて御書を書き給うたと\*

故に美しの御方、我らが為に祈り給え。

さすれば御身は御父の不平を抑え給うとともに、

我らが敵\*からその獲物を奪い取らん。

御身が我らを救い給いしこと我よく心得る、

65

御身はまことかくも優しさに満ちたるものなれば。

一つの魂が罪に落ち入りし時、

御身の憐れみはそれを再び救い上げるが故に。

その時御身はその魂と主とを和解させ給い、

過誤の道から連れ戻し給う。

70

御身を愛する者誰ひとりとしてその愛空しからず、  
人は命尽きる時これを知らん。

その者らは、暦が光輝く彩色の文字にて記されし如く、\*  
この世にて御身の御名によりて光輝く。

まっしぐらに御下に向う者は誰しも

75

おのが心ゆがみしやと恐れる要はなし。

慰めの元后、御身こそ我が傷のいやしを

求めんとする御方なれば、

我が敵に我の傷口を二度と開かせ給うな、

おのが健康を総て御手に委ねん。

80

我十字架の下なる御身の悲しみも

御子の悲しみに満つる苦痛もよく言い表わすこと能わず。

されど御二方の苦しみの為に我御身に祈る、

我ら皆の敵よ、不幸の奸計によりて、御二方に打ち勝ち、

御二方にかくまで罪を贖わせた

85

驕り昂るなかれと。

先に述べし如く、我らの存在の礎よ、

御身の明らかな憐れみのまなざしを我らに掛け続け給え。

モイゼは、燃ゆる木切れも無き所に、

赤き炎をあげて燃ゆるやぶ\*を目の当りにす、

90

それは御身の汚れなき処女性の象徴なり。

御身は、聖霊がその上に降り立ち、

モイゼが燃ゆると思ひなしたるやぶなり。

これは一つの予表なり。\*

永遠に燃ゆる業火から  
我らを守り給え。

95

比類なき気高き元后，  
まことにもし我らに慰めありとせば，  
それは御身より来たる，キリストの愛しき御母よ。  
アベ・マリアの短き祈りのみにて助け給う御身の如く，  
報酬をほとんど求めずして，  
逆境にある我らを和ませる  
いかなる音楽も他になく，  
我らが為に喜んで祈るいかなる擁護者も他になし。

100

盲目に対する御光よ，  
労苦と苦悩に対する御喜びよ，  
人々に対する恵み深さの御源よ，  
神が御身を御母に選び給えるは，謙そんの故なり。  
神は仕えし者から，我らが祈願を表わす  
天と地の元后\*を形造り給えり。  
この世は常に御身の善徳を待つ，  
御身が苦境に立つ者を誰一人棄ておかざればなり。

105

110

聖霊が御身を訪れ，その時  
大天使ガブリエルの御声が御耳元に届きし  
その訳を我いつの日か尋ねん。  
神は敵意からではなく後に贖われし  
我らの救いの為にかくも不思議なる御業をなし給えり。  
故に我らが救いに武器は要らず，  
ただ我ら然るべく，悔い改めざる場合には

115

憐れみを請うて、これを受けねばならぬ\*。

120

慰めの元后よ、然るに御子にも御身にも背き、

我が魂の地獄に落つるも

むべなりと思わるる時、

ああ、哀れなる我そもいずこに行くべしや？

そも誰が御身の御子に我を取りなし給うや\*？

125

憐れみの御源なる御身の他にそも誰が？

御身はこの世のいかなる言葉にても尽せぬ

憐れみを我らの逆境に対し掛け給う。

我を正し給え、御母よ、我を懲らしめ給え。

まことに我が父の懲らしめは、

130

いか様にしても我これを受くるに耐えざればなり。

御父の正義の御決算はげに恐ろしきものなればなり。

御母よ、我らが憐れみの湧き出ずる泉よ、

我を裁き、我が魂をいやし給え。

御身に憐れみを請い願う者総てに

135

御身の憐れみは尽きることなし。

まこと神は御身なくして憐れみを認め給わず、

御身がよみし給わざれば、

神はその善徳によりて何者をも赦し給わず。

神は御身をこの世の代理の支配者、

140

全世界の元后、更に天の元后になし給えり。

御身の意志に従いて神は正義を

抑え給い、その御証として

御身にかくも気高く御冠をかぶせ給えり。

神は不信仰の者共を追放されし 145

聖なる寺院に住み給う、

我は悔い改めし我が魂を御下に連れ行かん。

我を受け入れ給え、我たれより先に行くこと能わず。

天の元后よ、古の世に地上に呪いをもたらせし

毒のいばら\*によりて、 150

御覧の如く、我いたく傷つき、

その痛手深きが故に、わが命失われんとす。

いとも気高き衣服を身にまとい、

我らを天国の高き御塔へと導き給うおとめよ、

汚れと罪に生き来たりし我 155

いか様にして御身の御恵みと御助けを受けるべきや、

我に御助言を与え、我を導き給え。

御身の御席と呼ばるるかの法廷に

我を召喚し給え、清らなる花よ、

その花の如く憐れみも永遠にそこにとどまれかし。 160

御身の御子キリストが十字架に上られしは、

この世にありて受難し給うが為なり、

更にロンギウス\*が御子の心臓を貫き、

聖血を流さんが為なり。

全くこれ我の救いの為なり。 165

我今、キリストに対しよこしまにして不実なりしが、

キリストは我の破滅を望み給わず、

これに対し我全人類の救いたる御身に謝す。

イザアクはまことにキリストの死の予表\*なり、

殺害さるをもちとわざるほどに

170

父アブラハムに従わんとす。

正しく彼が如くに御身の御子は、一匹の羊としての死を望み給う。

憐れみに満つる御身、我御身に祈る、

キリストはその憐れみをかくも広く量られし故に、

御身広き心を示し給え。我らこそぞりて

175

御身の我らを罰から常に守り給うと高らかに歌い上ぐるが故に。

ザカリアは、罪深き魂の罪を洗い清むる

開かれたる泉\*と御身と呼ぶ。

それ故御身の優しき心なくば、

我ら滅びんとの戒め、強く述ぶるはわが義務なり。

180

美しのおとめ、アダムの子孫に対し御身は、

憐れみを掛けることが出来、そう望み給う故、

憐れみを受くるに足る悔い改めし者らの為に建てられし

かの宮殿へと我らを導き給え。アーメン。

## 注

“An ABC”は、聖母マリアへの祈りの詩であり、Guillaume Deguilleville による *Le Pèlerinage de la Vie Humaine* (c.1330) の Geoffrey Chaucer (c.1340-1400) による “a rather free translation” (W. W. Skeat [ed.] *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* [London: the Clarendon Press, 1894], Vol. 1, p. 452) である。Guillaum は Chalis にある a royal abbey のシトー会修道僧であった。Speght は彼の1602年版の序文において

Chaucer's ABC, called *La Priere de Nostre Dame*: made, as some say, at the Request of Blanch, Duchesse of Lancaster, as a praier for her priuate vse, being a woman in her religion very deuout. (R. D. French, *A Chaucer Handbook* [2nd ed.; New York: Appleton-Century-Crofts, 1955], p. 82)



と言うが、確証はない。Skeatはこれは“a mere guess”とみるが、“her pleasure”のために訳されたと考えうと言う(Skeat, p. 59)。

この詩の成立年は不明であるが、Skeatは1366年頃、Furnivellは1366?年、Kochは1369年、Ten Brinkは1373年頃とみる。いずれにしてもチョーサーの初期ないし中期にかけての作品とみられる。

原典は各連12行8音節で、aabaabbbabbaと2種の韻を踏むのに対し、チョーサーは各連8行10音節でababbcbcbと3種の韻を踏む。なおチョーサーは原典の最後の2つの連を省略している。(Skeatの版に原典が載せられている。)チョーサーによる一つの実験詩とみてよい。

この詩がイギリスの10音節の詩のきわめて初期の例であることは注目に値する(F. N. Robinson[ed.], *The Works of Geoffrey Chaucer* [2nd ed.; London: Oxford University Press, 1958], p. 855)。

“An ABC”の題名は、23の連からなるこの詩が、各連がAから始まりZ(i/j およびu/v/wは各々スペリングの上では同一視されていた)までで各々始まることによる(原典も同様)。

この詩はa religious poemであると同時に、a courtly love poem to the Virginとみることもできる(John Gardner, *The Life and Times of Chaucer* [New York: Vintage Books, 1978], p. 116)。詩人は罪からの救いを得ようと聖母マリアに憐れみを請う。その時彼女が彼を正しい道へと連れ戻し、罪に打ち勝つことができる様に助力を求める。こうした女性の力による精神的な高揚はcourtly loveのconventionである。

本翻訳のテキストはRobinsonの版を使い、注における聖書の邦訳は『旧約新訳聖書』(東京:ドン・ボスコ社, 1976年)による。

8行 悪魔のこと。

15行 the Seven Deadly Sins, 七つの罪源(「高慢」, 「物欲」, 「色欲」, 「ねたみ」, 「貪食」, 「憤怒」, 「怠惰」)のこと。

21行 cf. 「自分の心にとがめを感じるにしても、神は私たちの心よりも大きくて、すべてのことを知っておられる。愛する者よ、もし心にとがめるところがなければ、私たちは神に信頼をもつことができる。」(『ヨハネの第一の手紙』3:20~21)

29行 cf. 「敵はまた、剣をとぎ、弓をひきしぼって的に構える。」(『詩篇』6:13)

30行 受肉(Incarnation)の前のこと。

39行 cf. 「兄弟たちよ、それと同様に、あなたたちもキリストのおん体によって律法に死んだものとされた。それはあなたたちが、他の者、すなわち死者の中からよみがえられたお方に属して、神のために実を結ぶためである。」(『ローマ人への手紙』7:4)

52行 神のこと。

- 56行 地獄のこと。
- 61行 cf. 「私たちを責めて、私たちに反していた戒めの書を神は消し、それを取り去って」(『コロサイ人への手紙』 2 : 14)
- 64行 悪魔のこと。
- 73行 教会の主要な祝祭日は飾り文字で暦に書かれている。
- 90行 cf. 「主のみ使いは、やぶのなかから、火のほのおのような形でかれにおあらわれになった。モイゼがながめると、やぶは火でもえあがっていたが、もえつきない。」(『出エジプトの書』 3 : 2)
- 94行 このもえても失くならないやぶは処女マリアの予表である。
- 110行 聖母マリアのこと。cf. 「そこでマリアは、『私は主のはしためです。あなたのおことばのとおりになりますように』と答えた。そして天使は去った。」(『ルカによる聖福音書』 1 : 38)
- 120行 cf. 「洗者ヨハネは、荒れ野にあらわれて、罪のゆるしをえさせるくいあらためへの洗礼をのべつたえた。」(『マルコによる聖福音書』 1 : 4) 「求めよ、そうすれば与えられる。探せ、そうすれば見出す。叩け、そうすれば開かれる。」(『マテオによる聖福音書』 7 : 7)
- 125行 cf. *Piers the Plowman* B. vii. 196.
- 150行 sins を意味する。cf. 「地は、あなたのために、いばらとあざみをはやし、あなたは、野の草を食べねばならない。」(『創世の書』 3 : 18)
- 163行 Longius のことは原典にはない。*Piers the Plowman* では Longeus. 通例 Longinus と呼ばれ、十字架上のキリストの脇腹を槍で突いた盲目の古代ローマの百人隊長(centurion)、したたり落ちた聖血により目が見えるようになる。
- 169行 アブラハムが我が子イザアクをささげること(『創世の書』 22; 『ヘブライ人への手紙』 11 : 17~19) は、死からよみがえるキリストの予表である。cf. 94行。
- 178行 cf. 「その日、罪と汚れとにたいして、ダヴィドの家とイエルザレムに住むものたちに、泉が一つ開かれる。」(『ザカリヤの書』 13 : 1)